

主催 自立生活センター 自立の魂 ～略してじりたま！～

障害者エンパワメントプロジェクト2020

in YOKOHAMA

～東日本大震災と向き合えるインクルーシブ社会を目指して～

第4回オンラインプログラム（全4回）

報告

2021.3.9



トピック

- ◇第1部 講演：東日本大震災から10年 ～10年間積み重ねてきたこと、思い続けてきたこと～
- ◇第2部 グラレコ井戸端会議 ～防災編！～
- ◇最後に



第1部 講演：東日本大震災から10年 ～10年間積み重ねてきたこと、想い続けてきたこと～

2021年3月、東日本大震災から10年を迎えました。第4回オンラインプログラムでは、福島県南相馬市にある、さぽーとセンターぴあ代表理事の青田由幸さんをお招きし、ご講演をいただきました。青田さんからの話をお伝えします。

※事務局より

- 青田さんのお話をお聞きし、事務局が編集したものを掲載しております。
- 津波被害の様子を写真で掲載しております。2ページ下。



あおた よしゆき

青田 由幸さん

福島県南相馬市にある特定非営利活動法人 さぽーとセンターぴあ 代表理事

東日本大震災直後、全国ではじめて南相馬市に行政が保有する障害者台帳を開示させるなどして、取り残された被災障害者の安否確認をはじめ、避難生活やその後の生活支援を行ってきた。

写真1は、津波が浜に来た瞬間です。当時津波は最大10mぐらいといわれてましたが写真では30m以上の津波がきています。写真2は町に津波が押し寄せてきている様子です。私達の事業所から2km圏内でおきたことです。



写真1



写真2

災害関連死について

災害からは助かったけれども、その後の過酷な生活によって亡くなった人達を災害関連死といえます。福島県では、直接死よりも災害関連死の方が多いんです。これから大災害が起きた時

に、津波や地震から身を守るだけではダメだということです。その後生活を続けている人達の多くが亡くなっています。避難先であったり、避難後の生活であったりをきちんと考えないと、2次災害、3次災害が起きるということです。南相馬市、双葉郡の被害状況は以下の通りです。

【令和2年8月5日現在】

【南相馬市の被害状況】

- ▶南相馬市震災時人口 71,561人
- ▶津波被害家屋棟数 5,966棟（全壊、大規模半壊）
- ▶直接死 525人 死亡届 111人（県内最多）
- ▶災害関連死 525人
- ▶相馬市 直接死 439人 災害関連死 28人

【双葉郡（原発立地、隣接市町村8町村）】

- ▶直接死 254人
- ▶災害関連死 1,500人
- ※関連死は直接死の7倍に迫っていて、今も増え続けている。

津波被害について

東日本大震災で障害者は障害のない人に比べ、2倍以上亡くなっているという統計が出ています。それだけリスクが高いということになるわけですが、この数字についてもう少し考えてみると、東日本大震災で亡くなった人達の6割から7割を障害者・高齢者が占めています。

東日本大震災で津波が到達した地域宮城・岩手・福島は、それぞれの地域の人口の1%が亡くなっています。例えば宮城県石巻市の30万人であれば、3千人が亡くなっています。あれだけの津波が到達して、1%という数字は奇跡だと思います。一方で多くの人々が助かっているのも事実です。

では、なぜ助かっているのか。地域力です。地域に力があるということです。特にこの津波が到達した地域というのは、地域力が強いんですね。東北の津波被害にあった地域というのは以前から何度も津波が到達している場所で、「津波てんでんこ」が言い伝えられてきたからこそ、多くの人々が命までは落とさずにすんだのです。

津波の被害で亡くなっている障害者の中には、身体障害者だけではなく、知的障害者や精神障害者も多くいます。知的障害者や、精神障害者は移動に困難さはあまり生じないだろうと思われることや、家族に障害がある人がいるということを言っていないことが、理由です。そうするとその人達は地域の中で埋もれてしまいます。だから地域の人達が助けに行っていないので

す。津波が来ることを広報無線で伝えたり、色々とところに情報があっても、直ぐに避難をしなければいけないことを理解することが難しくて亡くなっている人達も多いのです。そういった問題が隠れて見えなくなっています。

国は、東日本大震災以前から南海トラフ地震を想定していました。東日本大震災発生以前は、南海トラフ地震による死亡者は、約 3 万人と想定していましたが、東日本大震災後、いきなり死亡者想定数を 30 万人に増やしたんです。この数字の根拠は何かというと、南海トラフ地震が発生する地域の人口を 3,000 万人とし、その人口の 1% の 30 万人が亡くなると想定しています。神奈川・静岡・愛知・和歌山・大阪は津波が到達することが想定されます。

私は 1% という数字を奇跡の数字と言っていますが、それは「津波てんでんこ」ができたからだと思います。

それから東日本大震災による津波の浸水エリアというのは、リアス式海岸ですから港町もありますが山もありますので、平地だけに津波が到達しているわけではなく、避難できる高台も多くありました。では、南海トラフ地震の場合はどうなるのかというと、まずは人口が多い、それから「津波てんでんこ」が浸透していないと考えられる、高台が少ない。ということは、浸水エリアが広くなると考えられます。東日本大震災の場合、一番広く津波による浸水をした距離で、海から約 10 km です。平均しても約 5 km です。南海トラフ地震による被害が想定されているエリアで、海から約 5 km の距離にどれだけの町があるでしょうか。静岡県などは港町ばかりです。南海トラフ地震による死亡者数が本当に 1% で済むのだろうか・・私はとてもじゃないけれど、1% ではすまないと思っています。そこには当然障害者・高齢者も数多く住んでいるわけです。多くの障害者・高齢者の避難を国は考えているのかというと、そこまで考えられているとは思えません。

防潮堤というものがあります。この防潮堤というのは平均 6 m ほどの高さになるのですが、東日本大震災で防潮堤はほぼ破壊されています。なので防潮堤すら安心してはいけません。とにかく逃げなくてはいけないということですね。南海トラフ地震で津波被害が想定されているエリアの人達は今から真剣に避難のことを考えなければいけないと思います。

東日本大震災による津波から無事避難した事例を紹介します。福島県浪江町の海沿いにある小学校は全員避難ができています。学生の中には車いすを使用している学生もいました。障害のある学生や、1 年生・2 年生を 5 年生・6 年生がサポートすることで避難ができたのです。

次に、岩手県の海沿いで高齢者向けに、グループホームとデイサービスを運営する事業所です。

この事例は素晴らしいと思っているのですが、東日本大震災発災の前日、震度 4 の地震が起きていたんです。あわせて津波注意報が出ていたんですが、その時に事業所の利用者は一斉に避難を始めたんですね。「津波てんでんこ」ですから、てんでばらばらに。そうすると職員は利用者をまとめて避難誘導することは難しかったわけです。さらに 1 人の利用者が、トイレに入っていて鍵を閉めて出てこなくなってしまうんです。まずは利用者を 1 ヶ所に誘導して、トイレに入っている利用者も誘導してそこから車に乗せて高台に避難しました。全員が高台に避難するまでに 1 時間以上かかったそうです。

津波注意報が解除され、事業所に戻ってきた後のミーティングで、その日の課題をその日のうちに解決する話し合いと行動をしたそうです。危険を感じるとトイレの中に鍵を閉め、閉じこもってしまう利用者がある。そこで、緊急時に備えてドアを外せるようにしました。

次に、避難をしようとする時に、利用者はまず何をしようとするかを考えたそうです。すると、利用者の皆さんは自分の大切な所持品や荷物を取りに行っていることがわかったので、緊急事態になった場合、利用者の所持品や荷物を 1 ヶ所に集めることで、利用者を安全に避難誘導できるのではないかと考えたそうです。また、車で高台に移動するにしても、大渋滞や、土砂崩れなどを想定し、避難ルートをあらかじめ 3 パターンは考えたそうです。直ぐにこれだけの備えをした翌日、東日本大震災が発生しました。前日のうちの備えのかがあって、無事、高台に避難ができましたが、それでも全員避難するまでに 40 分はかかったそうです。津波が到達したのは 45 分後です。避難中に津波は到達したことにはなりますが、全員助かっています。

その話をしてくださった施設長に「素晴らしい対応でしたね。」と伝えたところ、「津波の危険性を知っている利用者さんが、津波てんでんこの意識をもって避難をしようとしているからです。そのような利用さんたちのそばにいるからこそ、職員も備えの意識が高まっているのだと思います。」とおっしゃっていました。その通りだなと思いました。

今後も、いつどこで大きな災害が発生するかはわかりません。その時に何が必要なのかを考えておかないといけません。

東日本大震災で家族を亡くしてしまった人達は責任をずっと感じています。1 万人以上の方が亡くなったということは、それ以上の人達が心に傷をおったまま生活を続けているわけです。復興というかたちになって 10 年が経った今、「頑張ります。」とか「前を向いてます。」という声がたくさん聞こえますが、それは、そういうふうには言わないと先に進めない。そう言わざるを得ない状況も被災地ではあるのだと思います。

気づいてもらえない障害者たち

では、自分の身をどのようにして守っていくのか。という話ですが、まずは想定外を少なくするということが大切になると思います。1 つは避難所だけが避難をする場所ではないということです。避難所に誰が最初に辿り着けるのかと考えた時に、まず近所の人なんです。避難所のバリアフリー化もだいぶ進んではいますが、まだまだバリアフリーになっていないところが多いです。障害者や高齢者が避難所に辿り着くころには、避難所は避難者でいっぱいです。車いす使用者が移動できるような通路などは確保できていません。避難所のスペースはどこから埋まっていくかというと、壁側からなんです。スペースが空いているのは避難所の中心です。毛布などを踏まずに空いているスペースまで移動することは困難です。障害者にとって、避難そのものが非常に大変だということです。しかも登録している避難所が全て開くとは限りません。どこの避難所が開いているのかが分からない。想像で行くしかない。近くの避難所に行ってみたら閉まっていた・・・そんなことがあると、その時点で避難を諦めて壊れかかった家に戻るしかなく、被害にあった家屋に多くの障害者・高齢者が留まらざるをえない状況となりました。

全国から色々な人達が障害者支援の為に被災地に来ていました。ところが、障害者が見つからない。その理由の一つは、車いす使用者を中心に探していたからです。日頃から障害者支援に関わっている人であれば、避難所に避難をしている知的障害者や、精神障害者の存在になんとか気づくことが出来ますが、それが難しい。さらに言えば、声をかける時に「大丈夫ですか？」と声をかけてしまうんですね。多くの方が被災して大変なときに、「大丈夫ですか？」と声をかけて、「大丈夫じゃないです。」とはみんな言えないわけですよ。

私達が会いに行った方は、24 時間 2 週間車いすに乗ったままでいました。褥瘡になりかけていました。そういう方々に気づけないと、その先になかなか進めないと思います。

避難先は一つではない

私達は今、発災後、自宅が無事であれば無理して避難所に行かなくてもよい。ということを伝えていきます。現在、災害対策基本法が改正されましたので、在宅避難者も避難者として認めることになっています。避難所に届出を出すことで、物資が自宅に届いたり、安否確認が来たりする仕組み

になっています。なぜ在宅避難を勧めているかというと、大きな課題の一つである、災害後の介助の確保です。避難所での生活、避難所までの移動などの困難さを想定すると、自宅が無事であれば、環境の整っている場所で介助をしてもらった方が、互いに安心ではないでしょうか。

もちろんこれは被害の状況によります。もし自宅からの避難を考える場合にはライフラインが壊れているところから離れることも大切だと思います。いくつもの事例があるように、遠方へ集団避難をすることも選択肢の一つだと思います。

南相馬市の避難状況と災害関連死

南相馬市民の避難の状況をお話すると、原発事故の影響で、市長の避難指示もあり一時は約7万人が避難をしました。内約5000人は避難ができませんでした。より大変だったのは、病院や入所施設の人達です。移動方法はバス移動しかありません。しかも避難先が決まっていませんでした。300人~400人の患者さんを1度に引き受けられる病院なんて避難先として見つからないわけです。バス移動をしながら避難先を見つけなければいけないわけですから、1日じゃ避難できませんよね。3日、4日と点滴も打てない状態でバス移動が続けば、亡くなってしまいう人も出てきてしまいます。このような人達も災害関連死です。

実は、災害関連死というのは、「自己申請」なんです。申請をして認められてはじめて災害関連死になります。家族が亡くなくても、申請をしない人の方が多いです。災害関連で亡くなった方は、公表されている数字より多いはずです。直接の被害、命の危険から身を守るだけでなく、その後の生活をどうするかについては、まだまだ課題があります。

要援護者支援名簿

支援が必要な人がどこにいるかを、きちんと把握しておかなければいけないということで、要援護者支援名簿というものを作成しています。各市町村にその名簿があって、全国で作成しなければならないことになっています。でも現実的にこの名簿が役に立つかというと、申し訳ないですが、役に立ちません。それはなぜか。要援護者支援名簿に載る人は決められているからです。重度障害者や動けない高齢者しか掲載されていないんです。その他の避難困難者は名簿に載っ

ていません。法改正により、福祉サービスの為の個別支援計画と、個別避難計画を併せて作成することが求められていますので、福祉サービスを利用している障害者の多くは名簿に掲載されるようになってくるのではないのでしょうか。

南相馬市では、それとは別に災害に備えた仕組みを作っています。「ハザードマップ」というものが各地域にあると思いますが、ハザードマップの地域内に住んでいる障害者手帳を持っている障害者・高齢者に災害時どのような支援が必要かアンケートをとっています。「日中に災害が起きた時には避難ができない。」「水害が発生したら垂直避難というけれど、階段移動は難しいので自宅に留まる。」などの回答がありました。「車で迎えに来るとしたらどうしますか？」と、質問をしてみたところ、多くの方が避難を希望するという回答でした。

地域力を活かして地域の力で助けてもらいましょうというのは、やはり地域で変わってきてしまいます。もちろん何もやらないよりは良いですが、根本的に助かるか助からないか考えた時に、？マークがついてしまうと思います。誰かが助けにくる仕組みまで作れば、避難支援ができます。全員を対象にするのは難しいですが、ハザードマップで絞ることの方が助けられる人を増やせるのではないかと。というのが今の南相馬市の支援方法です。

福祉避難所について

法律では、まず指定避難所や一般避難所に避難をしてから、福祉避難所に避難をした方がよいかどうか判断する流れになっています。ですので、どこの福祉避難所に避難をするかも分かりませんし、2度手間です。また、福祉避難所を開いたとしてもその情報は提供されません。パニックが起こるという理由で、開示しないということが過去の災害でも多くみられました。今後は、福祉サービスを提供している事業所などに福祉避難所として登録してもらうことも必要だと思います。雨が強くなってきた時には、事業所に迎えに来てもらって、いつも通っている事業所でヘルパーさんも職員さんもいるところで待機できた方が安心ですよね。市町村が許可をすることが前提ですが、許可がおりているところが増えてきています。ですので、自分達の事業所を、福祉避難所として登録するというのも一つの方法かなと思います。

青田さんの講演をグラフィック化していただきました！！

講演の様子をトークグラフィッカーの山口さんにグラフィック化していただきました。

障害者エンパワメントプロジェクト2020 第4回オンラインプログラム

2021.3.9
東日本大震災から10年
～10年間積み重ねてきたこと、想いを繋げてきたこと～

こぼろセンターの代表理事 青田由幸さん
東日本大震災の関連死 南相馬もアガった

1 ●東日本大震災について

津波の147万
「七くまりちがその死の敵しいー」
がしきなどが巻き込まれている
鉄筋コンクリートの家も圧カゴべしぬこ
地盤は揺るが、飲み込んだ...

2 ●被害について

災害関連死
二次災害 3次災害になる
高齢者、障がい者の死亡率が高い
避難死より、791市町村もある
逃げさせた人もいる
「おんごん」
地域力が強い
おんごんを逃しけり

3 ●障害者の被害

隠れている障害者
つながらない
「おんごん」
何が必要なのかな??

避難がうまくいかなかった例
余震 → 対策が必要 → 対策がなかった → スムーズに避難できなかった
「おんごん」
が身に付いていたら

避難所について
「おんごん」
高齢者、障害者はロビーにいた
見つけない
「おんごん」
「おんごん」

4 ●課題

大丈夫ですか? 大丈夫です
「おんごん」
大丈夫ですか? 大丈夫です
「おんごん」
大丈夫ですか? 大丈夫です
「おんごん」

障害者の避難
「おんごん」
大丈夫ですか? 大丈夫です
「おんごん」
大丈夫ですか? 大丈夫です
「おんごん」

課題
「おんごん」
「おんごん」
「おんごん」
「おんごん」
「おんごん」

第2部 グラレコ井戸端会議 ～防災編！～



トークグラフィッカー やまぐち しょうた 山口 翔太さん

話の見える化の技術を活用して、参加者それぞれが主体性を持つ、対話、共創の場づくりを行っている。

行政から学校、企業まで、約280の場でグラフィックの導入実績あり。

第2部ではグラレコ井戸端会議～防災編！～と題し、トークグラフィッカーの山口翔太さんによるファシリテーションのもと、災害への備えについてディスカッションを行いました。ディスカッションのテーマは主に2つ。まずは、①「東日本大震災と同規模の地震が起きた時の困りごと。」です。24時間救助が必要な人にとって在宅避難をするか、避難所に避難をするかをどう判断するかが、悩みどころのようでした。また、いつ・どこで、災害に遭うか分かりません。外出先の場合だと様々な困難にみまわれることが考えられます。ペットと一緒に暮らしている場合の困難さなども挙げられました。テーマ②は、「明日からできることは何か。」話題の中心は日頃からの地域との繋がりについてでした。コロナ禍だからこそ、今まさに地域とのネットワークづくりが必要とされていること。地域との繋がりについても、地域によって違いがあるなどの意見がありました。一方で、災害時は障害の有無に関わらず、地域の力が弱まるという視点の意見もありました。平常時、忙しく働いている人でも怪我をしてしまうと動けなくなってしまう。それぞれが自分のことで手一杯になってしまう。そのようなことを考えると、地域の繋がりと併せて、外部支援団体との繋がりも重要なのではないかと感じました。災害が起きたときの状況をリアルに想像しながら、様々な角度からのディスカッションができたのではないかと思います。

ディスカッションの様子をトークグラフィッカーの山口さんにファシリテーションとあわせてグラフィックレコーディングをしていただきました。トークグラフィックの魅力はたくさんありますが、事務局小野が実際に体験して感じたことは、「沈黙」の時間を有効につかえることでした。私は、ディスカッションに参加する際、毎回たくさんの意見が聞ける楽しさと、沈黙の時間をつくってはいけないというプレッシャーがありました。そこにグラフィッカーの役割が入ることで、情報を整理する時間が生まれ、一つの意見を様々な側面からみることができる、とても有意義な時間が過ごせたと思います。

グラレコ井戸端会議の様子



障害者エンパワメントプロジェクト2020

第4回オンラインプログラム

●福祉避難所 実地・実態
 自分で登録が必要
 緊急時に不安がる
 登録しておく例も出てきている

●質疑応答
 Q. 原状復旧 などのように避難したのか?
 関係者が少く 情報が入ってきませんでした

Q. 避難計画の指示はどこが出るのか?
 連絡会 がある → 行政に 問い合わせ

shota 5

Q. 要介護者リストの当事者と行政のズレ

100%
 全世帯に 載っていない...

② 6

グラレコ井戸端会議 ~防災編!~

●ディスカッション①
 『東日本大震災と同規模の地震が起きたときの困り事』

●Aグループ
 トイレが 使えなくなる...
 エレベーターが止まる...
 避難するが... 家にいるが...
 30分以内
 当事者との 話し合い
 出芽する 出来ない事 を明確に

●Bグループ
 エレベーターが動かない
 外出中の 備え
 家までの 道のり
 電車も 止まる
 まわりの手助けを どうえるか...

●Cグループ
 どうやって 電話を 取るか...
 防災袋の 準備が 出来て大変
 1日の コト
 エレベーターが止まると 障害者も 困る...
 エレベーターはよく 止まる...

7

8



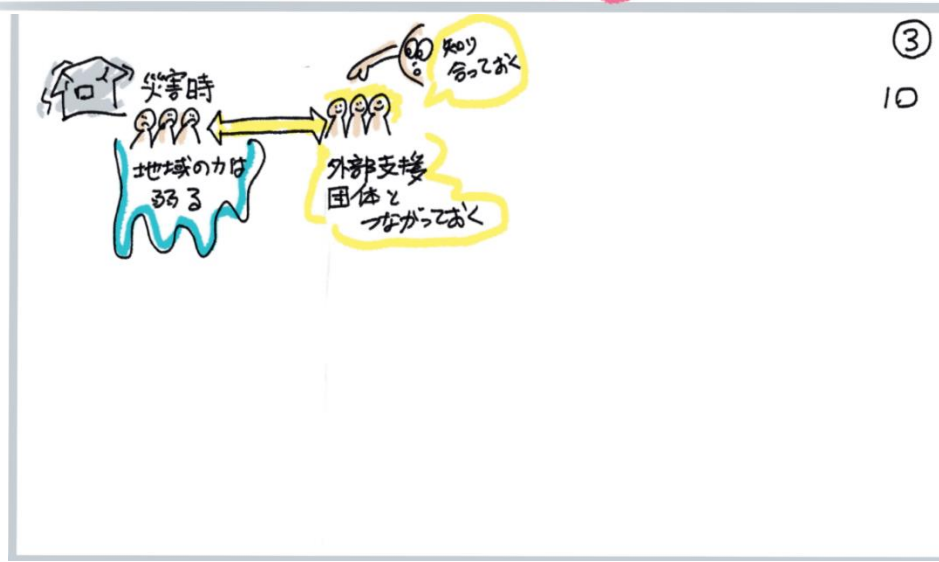
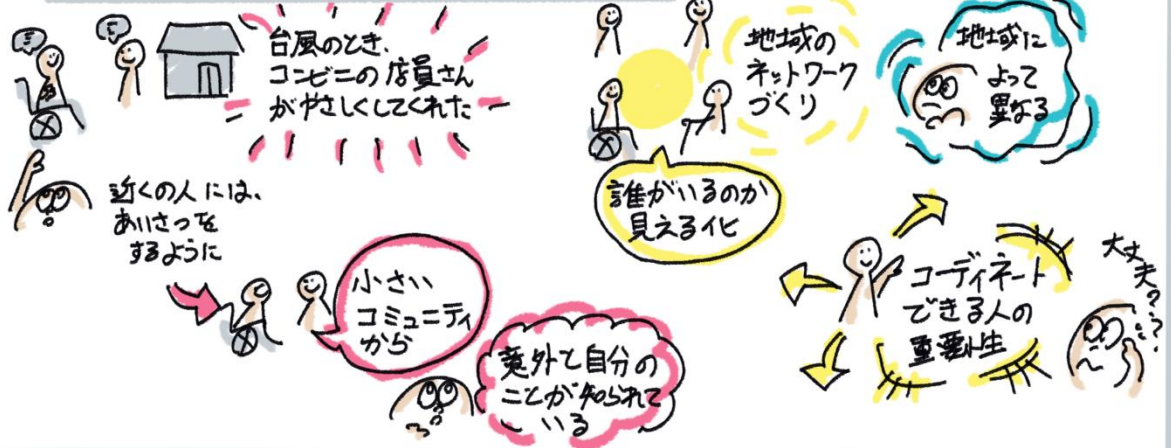
障害者エンパワメントプロジェクト2020



第4回オンラインプログラム

9

●フェイスカッション②「明日からできることってなんだろう？」



最後に

第4回オンラインプログラムでは、これまで自立の魂の活動にご協力をいただいた方々にもご参加いただきました。心より感謝申し上げます。将来は、本プロジェクトにご支援・ご協力をいただいている皆さまにもご参加いただけるようなプログラムを開催したいと考えております。

新型コロナウイルスの流行により、宿泊プログラムは実施できませんでしたが、オンラインによる活動の可能性を見つけられた1年でもあったと思います。もちろんリアルで互いに近い距離で活動できることにこしたことはありません。ですが、現状でできる活動は何か。それを考えることの大切さに気付けた1年でもあったと思います。コロナが流行する前までは、福島のメンバーとの打ち合わせはそう簡単なことではないと決めつけてしまっていました。それは私たちの選択肢に「オンライン」がなかったということと、打ち合わせは対面でなければならないという、固定観念があったからかもしれません。自分たちの都合ではなく、目的に応じて柔軟に活動することの大切さを実感した1年だったと思います。